

W1762×H1112 喜連小学校案内板 壁付け型

喜連の村づくりと地場産業や文化の発展Ⅱ

3

喜連の村づくりと地場産業や文化の発展Ⅱ

①古民家 近世中期には法性寺に寺子屋が開かれ、村の豊かさは教育、文化、信仰に注がれた。文化年間(1810頃)～天保年間(1850頃)は屋敷新築ラッシュが見られ、当時の繁栄ぶりが、寺社と屋敷からなる現在の歴史的景観を形成している。



文化年間の屋敷①



文化年間の屋敷②



天保年間の屋敷

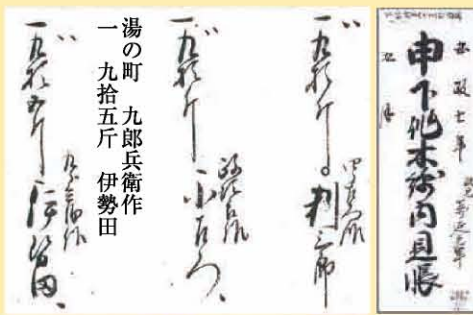


屋敷小路 喜連年間の屋敷(右奥)



中馬野街道の油店(明治初)

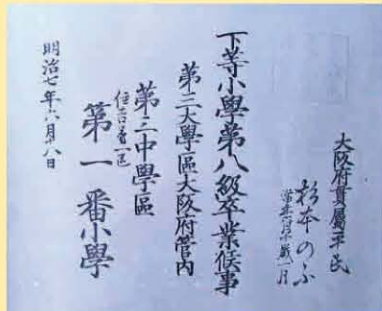
②西喜連村「月参講」太神宮常夜灯 ③綿作帳
西喜連村「月参講」太神宮常夜灯と木綿内見帳「伊勢田」から、旅費を積立て、毎月誰かが伊勢参りに出かけていたことが窺える。



喜連はいち早く綿作シフトし、享保期に8割近い驚異的な作付け面積に達する。畑に加え、田の半分を盛土して、手間のかかる「田方綿作」で収益性を高めた。半反(約500㎡)で実綿百斤(平野目換算44kg)の収穫が目ざされた。

④寺子屋教科書

⑤喜連小二期生の卒業証書
慶応元年(1865)の寺子屋教科書。
村人の文化や教育に力あった喜連村は、学制発布の明治五年(1872)、寺子屋があった法性寺に住吉郡第一番小学校を設立。大正14年大阪市編入後も、現大阪市で八番目の創立という古い歴史を誇っている。



喜連小二期生の卒業証書

◆かつての喜連環濠風景

下水道工事と民家新築時のボーリングなどで、中世喜連環濠は深さ3m、幅10m以上と判明。戦乱時、村を守った環濠は平和な江戸時代に次第に田圃・宅地化した。高度成長期まで農業、生活用水に活用されてきた。終戦後まで石垣のあるシジミが採れ、ホタルが飛び交う水路だった。

◆喜連環濠集落

木造校舎の昭和31年運動会。
35年鉄筋校舎に改築。



喜連最後の相撲風景(昭和36年)

◆喜連の相撲



江戸時代から河内十三組に属し地相撲文化が栄えた。親方がいて相撲部屋もあった。左は門弟中が建てた親方の生前墓。



環濠の尻矢口地蔵 昭和20年代



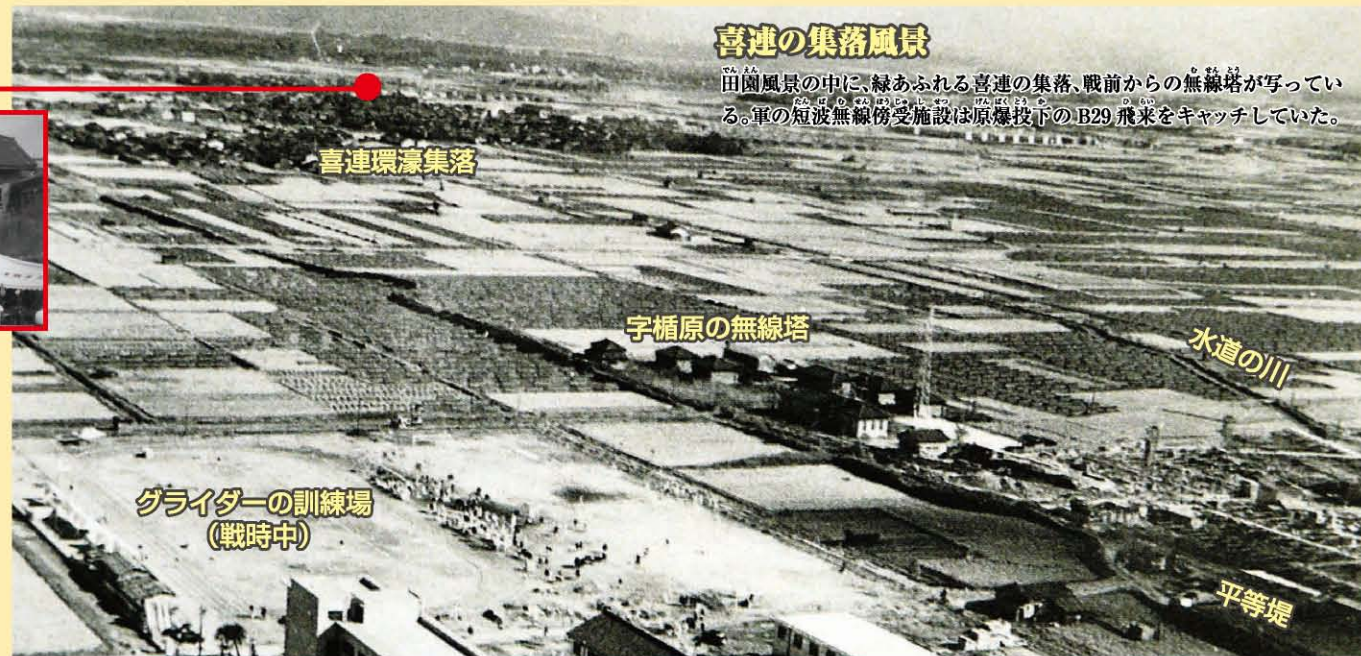
長橋家前 昭和初期



馬倉附近 昭和28年頃

喜連の集落風景

田園風景の中に、緑あふれる喜連の集落、戦前からの無線塔が写っている。軍の短波無線傍受施設は原爆投下のB29飛来をキャッチしていた。



喜連環濠集落

字楯原の無線塔

水道の川

グライダーの訓練場(戦時中)

平等堤

昭和20年代